

韓 国 管 見 (3)

農林省 園芸試験場 野菜部長 西 貞夫

韓国の研究者(つづき)

種苗会社の農場や本社を訪問すると、何人かの旧知の顔に会った。それらの人々は前回の訪韓の折に園芸試験場の職員として、熱心に自分の研究を説明して下さり、あるいは程度の高い質問をして小生を赤面させた研究者であった。それらの研究者が事情は知らないが今回は種苗会社の中堅所として活躍されているのである。研究テーマの問題やポストの少ないことなど、いろいろ事情あったの事と説明は受けたが、給与についての不満(?)も大きなモメントとなつてのことであろう。園芸試験場の方々も種苗会社の方々もそのことにあまり触れたくないような様子(当然のことであるが)であったが、知り得た限りでいうと、種苗会社の一般研究員で5~6万ウォン、科長クラスで9万ウォン、部長クラスで12万ウォン、場長クラスで15万ウォン程度の給与であり、重役待遇の場長ともなると、年に3か月分くらいのボーナスをもっているとのことである。単純に計算すると大体園試職員の約2倍の給与である。給与の額だけですべてがきまらなと思うほどに筆者もエグツクはないが、倍の給与というのでは、若いドライな研究者にとっては去就をきめかねる心境になることもあることであろう。

育種についていうと、韓国の試験場と大手種苗会社とはわれわれの目からは若干おかしな関係になっている。もっとも多くの方々のご存知

のように、品種改良における官公機関と民間機関との関係は世界的に変異に富んでおり、必ずしもその主導権の所在と品種改良の進展の度合とは関係なく、またその国がいわゆる先進国であるか発展途上国であるかとも関係ないといつてよい。また官民両機関の関係は作物によつても一様ではない。たとえばイネの育種についてみると、わが国ではそれが重要な作物であるが故に官公機関の所管するところになっているが、アメリカではとるに足らない(?)作物であるが故に、民間機関の関心をひかず、官公機関の扱うところとなっている。一般育種であってもヨーロッパとアメリカとは同じでなく、そのような事情から Breeder's right の問題が国際的関心を浴びるようにもなっている。Breeder's right は総じて後進国ほど軽視する傾向があるとされているが、事園芸作物(とくに花き類)についていうとわが国は、盗賊に近いとみられている節もあるから、これは国の経済的事情よりも、心情的な進歩の程度を反映しているものと理解するほうがよいのかも知れない。

話を本論に戻すと、韓国の大手種苗会社の農場では、いわゆる基礎的研究が相当に行なわれており、これに対して園芸試験場のテーマの中にむしろ育種事業的といつてよい試験・研究が重要な座を止めているという一見奇妙な現象がみられるのである。たとえば、前回訪問の折には大手筋の種苗会社農場で、放射線(X-線)

利用による各種野菜の突然変異の研究や、種属間交雑に伴う傾母雑種（*pesudogamy*）の研究、あるいは雄性不ねん性の遺伝に関する研究などが行なわれており、幸にして筆者が手がけた問題と共通していたので、討論に応じたり、批判がましいことまで述べる事ができたが、本心のところでは、一体このような研究が、その韓国で代表的とされるものであるが、1民間種苗会社の、現実の品種改良の段階（現状）とどう結びつくのであろうかと心配になり、反面かけはなれた研究に投資している経営者の大らかな気持ち（？）に感心させられたのであった。筆者のメモを繰りかえしてみると、当時韓国で市販されていた品種は大部分がいわゆる単種であり、一代雑種もカタログにはあったが、その信頼性には疑問が持たれ、どうも日本の品種を購入して、独自の名称をつけて販売しているのではないかと思われる節もあった。また一代雑種の組み合わせにしても、その理由の納得できないものが多く、事実日本に持ち帰って栽培してみると、頭をかしげるようなものが多かったというのが実状であった。しかしながら上に述べた各種の研究は、その多くが雄性不ねん性など一代雑種の省力・能率化を目ざすものと説明されたので、その意味では研究がさきどりのに行なわれているとも理解されたが、当時のわが国の状況は、すでに試行錯誤的手法によったとはいえ、一代雑種の実用段階に入っていたので、なぜ韓国において種苗会社がそのような、いわゆる基礎的研究を行なうことから一代雑種の生産を始めねばならないのかというような理解に苦しむ点も多かった。研究は所詮人間が行なうものであり、たてまえ論的な理念が先行したとしても最後はそれを行なう人間の判断の如何に帰せられるものであるから、このような研究熱は、どう

やら種苗会社の主要研究者が、大部分園芸試験場から移ったばかりの方々であったことに帰因しているようでもあった。筆者などからみると、わが国の一代雑種万能主義はきわめて変則的といえる面をもっており、商業主義の産物で農民不在の性格が過ぎると指弾しうるものであるけれども、当時の韓国の野菜生産の状況はこれとは違う意味で、必ずしも一代雑種品種が必須という段階とは思われなかったので、このような先進的志向のもつ効果は疑問というほかなかった。

いっぽう園芸試験場（当時は未だソウルにあった）においてはこれと異なり、育苗や土壌肥料についての栽培的試験が主要な研究課題を占める一方、育種については不和合性の利用によるアブラナ類の採種法とか、系統選抜によるアブラナ類の採種などといった、即効的ともいえる試験が行なわれていた。

戦後の韓国園芸界、というより韓国農業は、日本の官界を失意のうちに去ってタキイ種苗に入り、不和合性利用の理論で、今日のアブラナ類一代雑種隆盛（と同時にタキイ種苗がまっとうな種苗会社と評価される）の基を開いたが、戦後故国に戻られた故禹 長春博士（母君が日本人）の指導を受けた。同氏は李承晩大統領の積極的な反日政策の下にあって、滞日中の不遇の代償として偉人の取り扱いをうけ、園芸試験場長の職にあられた。戦後の韓国の経済事情の制約などがあって、研究環境の不満足なものであることを嘆いておられた由であるが、当時としては優俊が同氏の門下となって指導をうけ、その流れを汲む人々が園試の職員として奉職し、その研究環境にあき足りなかった人々が、同氏の没後待遇のこともあって種苗会社に職を転じたとのことであった。したがってある意味では

禹氏の培ったアカデミズムが、そのまま種苗会社を持ち込まれたという形のものであった。そして敢て我見を述べるならば、園芸試験場はそのような雰囲気と排反する環境にあったようである。6年後の今回の訪問でもそのような両者の関係はあまり変わっておらず、むしろ好ましくない方向に走ったとさえ思われたが、その理由の一つは次のような点にあるようである。

6年経った現在の韓国の野菜品種は、ようやくにして一代雑種時代に入りかけている。農民の経済水準からみて、あるいは一般の消費水準からして、これが賢明な策かどうか不明の点もあるけれども、とにかく急速に一代雑種がひろまっている。その結果一部では種子代を農民が払いかねて、価格の低減が問題とされている。一代雑種種子の高いことは国会の問題にまでなっており、筆者の帰国直後には興農種苗の幹部が、暴利の疑（物価統制令的な規制があるので）で喚問されるという事態にまで立至ったという。対象とされたのは同社の販売しているダイコンの一代雑種であるが、その価格が一般農民の手に余るというのであったが、取調べの結果は、却し売り価格の10倍もの値段で農民が買わされている事実はあったが、それは一代雑種の人気(?)に目をつけたブローカーによる中間マージンのためとわかって、釈明が認められたとのことであった。これらの一代雑種のあるものは不和合性の利用によっているが、なかには人海戦術的に人手によっているものもあり、あるいは花期のずれを利用したものもある。韓国の労賃がわが国や台湾に比べて割安であることは早くから知られてきたところで、6年前には食事を提供すれば賃金を払わないでもよいという例が珍しくなかったのであるが、さすがに最近では労力の都市集中のおおりで農村の労賃もあがり、

800ウオン程度で食事・酒別というのが一般的になってきたという。そうすると人海戦術的方式も容易でなくなるので、種苗会社の主要な関心は、一代雑種確保→生産費低減→雄性不妊性あるいは不和合性利用という方向に集り、その結果いわゆる基礎的研究なるものが、農場の主要な業務になるということのようでもある。

これに対して園芸試験場がどのような立場になるかということとは、きわめて興味のあることであり、農林当局あるいは園芸試験場の直轄官庁である農林振興庁の考え方を知る材料ともなるのであったが、われわれの目からみると不幸にして(?)、両者は競争の立場におかれてしまっているようであった。日本的安直発想法によると、いわゆる基礎的部門の研究は官公機関にまかせて、その成果を民間機関が利用するという形になるのではないかと想像したのであったが、以上述べてきた両者の職員構成などの関係もあってか、園芸試験場は種苗会社が利潤をあげている品目の生産を独自の立場からさらに容易にして、農民の負担を軽減すべきであるという指示を受けたようであった。その結果、園芸試験場は現在大手筋種苗会社が市販してある程度の名盛を博しているような作目の一代雑種育成を広範に進めるという使命を負わされることになった。そのようになると、すでに多くの経験を持ち、しかも利潤(慾)と道連れで仕事をしている種苗会社と競争するということは、(わが国の場合と同様)きわめて困難なことであって、その帰趨はおのずから明らかというケースも多いかにみうけられた。

筆者は園芸以外の研究分野、たとえば放射線利用部門、病害虫部門、稲作部門などについても若干の研究者と論議を交わす機会があったが、率直に言って農林当局が研究者に求める成果は、

いずれも明日何をすべきかということが多く、そのような成果を期待するには、それ以前に段階を踏んですべき、いわば予備的な投資ともいべきものへの配慮が乏しいこと、数年さきを見こしての研究に対する処置が怠られていることなどが、至るところで散見され、研究をも含めた産業庁としての農林関係機関が、当面全力をあげて貧困にあえぐ農民の救済に献身すべきであるとする熱意には打たれるものがあったが、そのために必要な基本的な姿勢の一貫性や一見無駄ともみえるもの（たとえば研究投資など）に、目をつぶって成果を待つというような態度の少ないことが感ぜられた。もっとも夫子自ら省て、汝の国は如何ということになると自信を持っているわけでは決してない。

以上若干回くりどい表現を重ねて紹介してきたが、韓国の園芸関係の研究体制は、われわれの状況とは相当に食い違っている。しかしその反面、園試の職員と大手筋種苗会社の研究員とは、あるいは旧同僚であり、あるいは先後輩という関係にあり、あるいは旧上司・部下というような人的関係を持っているので、個人ベースでのつき合いは悪くなく、その面で相補的に仕事を進めているようであったが、さきにも述べたように園試の研究業務もすべてがきびしい評定制度的下におかれているので、育種というような、やってみなければわからない性格を持つ業務を担当する研究者は、さぞやつらい日々を送っているのではないかと同情されることではあった。

韓国の野菜生産

さてようやくにして、本題の一つである韓国の野菜生産を紹介する段階にまで到達したが、以下に述べることは、筆者が滞韓中に園試職員

から教示を受けた事項、種苗会社の職員のメモおよび農林庁・園芸試験場が発行している、英文の小冊子“Korea Vegetable Culture”，Horticultural Experiment Station, Office of Rural Development, Suwon, Korea, Sept. 1971, pp 113。などによっている。

(1) 野菜の栽培面積・生産額・農家数

1970年の統計によって、最近5年間の野菜の栽培面積・生産額および専業農家個数をみると表1のとおりである。1965年度の栽培面積は前年比109，生産額は同じく110であって、1969年から両者とも著しい増勢に向かったといえるようである。

表1 野菜栽培面積・生産額・専業農家数

年	栽培面積 (ha)	生産額 (M/T)	農家数
1965	150,673	1,576,005	13,251
1966	154,154	1,717,188	13,604
1967	177,265	1,869,425	13,644
1968	192,292	2,150,156	23,648
1969	226,332	2,427,545	21,009

(2) 野菜生産の内容

1969年度の栽培面積・生産額を、個々の野菜について調査した結果が表2である。原資料にはないが、わが国の10a当り収量を参考までに併記し、比較に供した。

この表から知られるように栽培面積の最も多い野菜はハクサイであって、これにダイコンがつづき、トウガラシ、ニンニクといった、いわゆるキムチ漬けの材料となる野菜が群を抜いているといつてよい。後に述べるように、野菜の分類についての韓国の状況は、第二次大戦後のわが国に似ており、トマト、カンラン、カリフラワー、レタス、セルリー、パセリー、アスパラガスなどは西洋野菜 (Western vegetables) と呼ばれ、駐留国連軍 (即米軍) 用として作られる比率が高い。ダイコン・ハクサイの作付け

表2 主要野菜の栽培面積・生産額・10 a当り収量(1969)

種 類	栽培面積 (ha)	10 a 当り収量 (kg) (日本)	生産額 (M/T)	順 位	
				韓	日
ト マ ト	3,419	1,474 (4,037)**	50,405	12	12
ナ ス	2,551	1,245 (2,910)	31,773	13	9
ト ウ ガ ラ シ	31,823	196 (223)	62,473	3	17
キ ュ ウ リ	6,934	1,238 (3,012)	85,840	7	7
カ ボ チ ャ	8,787	1,137 (1,695)	99,900	5	14
ス イ カ	5,807	1,824 (2,904)	117,150	8	4
マ ク ワ ウ リ	7,544	1,206 (1,540)	90,976	6	15
カ ン ラ ン	2,493	2,213 (3,253)	55,176	14	3
ハ ク サ イ	67,258	1,176 (3,790)	790,602	1	2
ホ ウ レ ン ソ ウ	4,106	925 (1,534)	37,987	11	11
ネ ギ	5,655	1,021 (2,210)	57,715	9	8
タ マ ネ ギ	4,500	2,197 (3,330)	98,867	10	6
ニ ン ニ ク	14,156	560 (906)	79,262	4	18
パ セ リ ー	786	1,336 (1,880)	10,500	15	19
ア ス バ ラ ガ ス	661	21 (253)	136	16	16
ダ イ コ ン	54,439	1,326 (3,413)	721,609	2	1
ニ ン ジ ン	511	875 (1,963)	4,466	17	10
ゴ ボ ウ	108	991 (1,626)	1,067	20	13
サ ト イ モ	115	821 (1,405)	948	19	5
シ ョ ウ ガ	470	751 (1,200)	3,530	18	17
マ ッ シ ュ ル ー ム	46	7,721 (—)	3,583		
そ の 他	4,163	662	23,580		
計	226,332	1,073 (2,003)	2,427,545		

(*小数以下四捨五入, *1969年作付面積・収穫量から換算)

の多いことは現在のわが国と同様であるが、以下の順序はわが国のそれとは相当異なっている。各野菜の栽培面積の多寡の順序を示すと最後尾の欄のようになって、日・韓両国の違いがある程度推察できるといえよう。

表2から知られる最も顕著な違いは、両国の10 a当り収量である。トウガラシ、カボチャ、マクワウリ、パセリーなど若干の野菜を除くと、10 a当りの収量には著しい違いがある。特に韓国の主要野菜であるはずのハクサイ、ニンニク、ダイコン、ニンジンなどについて、その生産力に著しい差のあることが注目される。また果菜類も日本が大体2～3倍の収量をあげていることになっているが、これは双方ともに不時栽培の収量も含んだ数字であるから、施設栽培

での生産力の違いが大きく影響しているものと考えられる。その結果もあってか、単純計算による彼我の総平均10 a当り収量も、わが国がほぼ倍という数字となっている。このような差はイネ（水田）における生産力の差をさらに上回るものであって、施肥・薬剤散布等の生産費のかけ方に格段の違いのあることによってい

(3) 不時栽培

前項の数字は不時栽培を含んだものとされているが、1969年の数字であって、1970年については不時栽培のみの数値がある（表3）。1969年は統計のとり方が違っているため、直接の比較はできないが、ビニルトンネルとビニルハウスでの生産が表3左のようであった。

両表を比較すると明らかなように、わずか1年 たことになっている。

の間にほとんど3倍もの不時栽培の増加があっ

表3 不時栽培野菜の生産状況

年 度	1 9 6 9						1 9 7 0					
野 菜 名	ビニルハウス		ビニルトンネル		（ 合 計 ）		作 型				合計(ha)	
	面 積 (ha)	生産額 (M/T)	面 積 (ha)	生産額 (M/T)	面 積 (ha)	生産額 (M/T)	促 成 (ha)	半促成 (ha)	早 熟 (ha)	抑 制 (ha)		
ト マ ト	2065	9519.7	611.6	23845.0	818.1	33364.7	526	3522	1245.9	8.4	16591	
ナ ス	5.0	268.5	221	6722	27.1	940.7	0.2	29.9	223.2	0	253.3	
トウガラシ	33.7	1117.6	118.9	2457.2	152.6	3574.8	5.9	50.4	1446.2	0	15025	
キュウリ	297.7	18840.6	500.2	17877.2	797.9	36717.8	124.7	271.4	1175.8	26.3	1598.2	
カボチャ	33.0	1607.0	45.9	2416.4	78.9	4023.4	14.5	62.0	541.6	7.8	625.9	
スイカ	44.0	1742.5	969.1	39652.5	1013.5	41395.0	0.8	38.1	547.0	33.1	619.0	
メ ロ ン	10.4	2857.7	37.3	771.0	47.7	3628.7	63.6	13.9	16.1	0.4	94.0	
マクワウリ	34.5	1784.5	337.6	9435.8	372.1	11220.3	10.8	49.7	1486.5	6.0	1553.0	
イチゴ	14.5	146.6	25.3	286.2	39.8	432.8	2.8	23.7	4.4	0.5	31.4	
カンラン	5.0	292.6	23.0	1972.6	28.0	2265.2	—	—	—	—	—	
ハクサイ	156.0	7303.2	307.8	11933.8	463.8	19297.0	75.0	430.4	1609.0	347.7	2462.1	
ハウレンソウ	5.5	102.8	1.5	28.2	7.0	131.0	1.1	36.8	14.9	20.1	72.9	
レ タ ス	79.4	4863.0	59.0	1315.2	138.4	6178.2	82.9	112.4	139.3	30.2	364.8	
タマネギ	1.3	476.5	5.3	283.4	6.6	759.9	—	—	—	—	—	
ニンニク	0.6	27.6	0.2	2.4	0.8	30.0	0.5	0.7	83.0	3.7	87.9	
セルリー	1.9	1100.2*	0.1	3.5	2.0	1103.7*	2.1	10.4	1.5	0.6	14.6	
パセリー	8.6	225.2	6.6	123.5	15.2	348.7	2.8	23.7	4.4	0.5	31.4	
ダイコン	0.2	12.2	12.5	432.9	12.7	445.1	0	6.4	1058.9	675.6	1740.9	
ジャガイモ	—	—	144.5	1320.0	144.5	1320.0	—	—	—	—	—	
その他	65.8	1767.2	89.1	5694.9	154.9	7462.1	5.2	24.8	36.4	25.6	92.0	
合 計	1004.0	54055.2	3317.6	120583.9	4321.6	174639.1	445.5	1536.9	9634.1	1186.5	12803.0	

* 疑わしい数値(100.2か?)

1969年の数字からみると、施設栽培の総面積は4322haで、生産額は174639tとなっている。栽培面積ではハウスとトンネルとが1:3の比率となっているが、生産額では1:2程度にせばまり、ハウスのほうが生産力が高い。ちなみに1969年度のわが国の野菜用ビニルハウス面積は9.7千ha、同ビニルトンネルは約2万2千haである。ハウス面積ではキュウリが最も多く、ついでトマト、ハクサイの順となっており、米軍用のレタスがこれにつづいているほかはきわめて少ない数字となってい

る。施設栽培は、トンネル → ハウス → 連棟ハウス → 大型ハウス → (多分・ガラス室)というのが通常の進化の道筋であるが、韓国の場合も同様の過程を辿っている。トンネル栽培ではスイカが最も多く、ついでトマト、キュウリ、マクワウリ、ハクサイが多い。ハウストンネルを合計した数字になると、スイカの1000haが群を抜いており、これにトマトの800ha、キュウリの約800haとなり、はるかに

はなれてハクサイの460haが続いている。1970年度の数字は作型別の数字であるか

ら、ハウス・トンネルの別は明らかでないが、促成栽培が445 ha と最も少ないのは、トンネルに比べたハウスの立場を示しているといえるであろう。施設栽培の総面積でみると、ハクサイが約2500 ha で第1位、以下ダイコン、トマト、キュウリ、マクワウリ、トウガラシとつづいており、果菜類の早熟栽培が急増してきたのは、ビニル類の利用がようやく本格化したことを物語っている。

このようにして、現在韓国では施設園芸が急速に増加しつつあるが、その内容をみると今後の発展には幾つかの障害が予想される。第1に後で述べるように韓国の気候は全体にわが国より低いので、促成・半促成栽培は加温の必要が大きい。現在のところはコモかけやビニルの二重被覆というような形でそれを行っており、少しでも作期を前進させるために、相当に無理な育苗を行ない、早期定植という形になっている。わが国で戦前の促成栽培が九州南部と四国南岸に限っていたように、天然の利点のみに頼って、施設栽培はギリギリの線まで押し進められてきている。そこでいわれる施設栽培という

のは多くの場合人工の加温を行なっているものではないのである。したがって、今後施設栽培をさらに拡張しようとし、あるいは前進させるためには、当然加温あるいは保温の機械・器具施設が必要となる。しかし前にも述べたように農村の一般家庭には電気のある所が少ないのであるから、モーターの関係するようなものあるいは電熱器機が畑に入るといことはまず考えられないのである。施設園芸とはいっても、これは温度の積極的管理のないそれであるから、全体としてきわめて無理な栽培が行なわれており、収量の低いこともまた当然といわなければならないのである。現在韓国政府では、今後野菜栽培を発展させる地域として、海流の関係で温暖な済州島（年平均温度が約15℃で、温州ミカンが栽培できる）、釜山周辺、多島海の一部および光陽付近を予定しているようである。済州島を別とすれば、電力事情の整っている釜山周辺と光陽付近およびソウル近郊とが、今後施設園芸の中心となることであろう。

(4) 野菜産地の気象条件

韓国の代表的地点の気象をみると、表4・図1のとおりである。釜山は緯度でみるとわが国

表4 主要地点の気象状況

地名	緯度	平均気温 ℃	年降水量 mm	降水日 日	晴天数 日	初霜 月日	終霜 月日
江陵	38°-37°	12.3	1,289	114	99	11 13	4 9
ソウル		11.7	1,412	110	89	10 8	4 7
仁川		11.5	1,254	109	95	10 19	4 12
水原		11.4	1,663	124	105	10 10	4 12
浦項	37°-36°	13.3	1,128	100	102	10 10	4 12
大邱	36°-35°	12.9	1,054	90	103	10 15	4 11
全州		13.0	1,382	123	109	10 8	4 28
蔚山		13.2	1,275	95	106	10 16	4 28
光州		13.1	1,387	131	87	10 9	4 28
釜山		14.0	1,557	101	108	11 24	4 4
麗水	35°-34°	13.6	1,437	105	90	11 6	4 6
木浦		13.8	1,125	123	86	11 15	4 10
済州	34°-33°	14.9	1,363	139	103	12 1	3 31
西歸浦		14.5	1,618	135	76	11 23	2 29

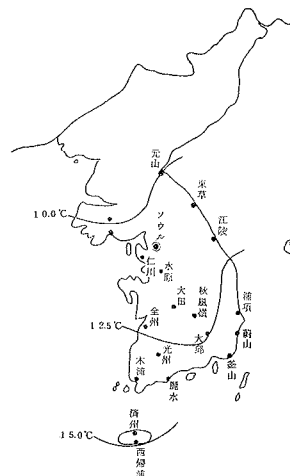


図1 平均気温分布

の名古屋・東京に相当し、ソウルはほぼ新潟・仙台の線と考えればよい。

韓国の気候は全般に大陸性であって、次のような傾向がある。① 春は一般に短く乾燥しているが、特に4・5の両月は乾燥がはげしく、干害の出ることがある。② 夏の期間が長くて年降水量の3分の2がここに集中する。③ 秋は概して短く、気候は安定して晴天が多い。④ 12月から翌年2月までは長くてきびしい冬ということになり、しばしば降雪をみる。

(5) 主要野菜産地の分布

主要な野菜産地は、主要5大河川の沿岸に分

布している。すなわち地図に示す (A) 漢江沿岸地区(砂壤土地帯)、(B) 錦江沿岸地区(しよく壤土地帯)、(C) 洛東江沿岸地区(砂壤土地帯)、(D) 蟾津江沿岸地区(砂壤土地帯)、(E) 榮山江沿岸地区(れき質砂土地帯)の5区である。漢江沿岸地区には約30,000 ha、錦江地区は約10,000 ha、洛東江地区30,000 ha、蟾津江地区10,000 ha、榮山江地区10,000 haの野菜産地が分布しているとのことである。図2はこれら地区と主要な野菜産地の分布を示したものであって、各産地の栽培品目を示すと表5のとおりになる。

表5 主要野菜産地と生産品目

(番号は地図中の番号に同じ)

産地	生産品目*	産地	生産品目*
(1) ソウル	野菜一般	(11) 務安	タマネギ
(2) 春川	野菜一般	(12) 順天	促成栽培
(3) 大関嶺	不時栽培	(13) 高興	ニンニク
(4) 黄池	不時栽培	(14) 晋州	野菜一般
(5) 忠州	野菜一般	(15) 昌寧	タマネギ
(6) 瑞山	ショウガ	(16) 金海	冬季野菜
(7) 温陽	半促成栽培	(17) 大邱	野菜一般
(8) 大田	半促成栽培	(18) 義城	ニンニク
(9) 全州	ショウガ	(19) 英陽	トウガラシ
(10) 羅州	野菜一般	(20) 済州	冬季野菜

*園試資料の表現による。

すでに再三述べたように、ソウルは全人口の5分の1を占める大都会となっている。したがってソウルに対する野菜の出荷・安定した供給は人心の安定あるいは生鮮食糧品の価格安定からしても重要な問題となっている。年間ソウルで取扱われる野菜の量は6,000トンに達しているのであるが、それらは次のような地域から供給されている。すなわち、一般の野菜はソウルの北からのものとして高揚・把州・加平など38度線近くの地帯の産物、南のほうからは上に述べた主要産地である平昌(江陵の西)・瑞

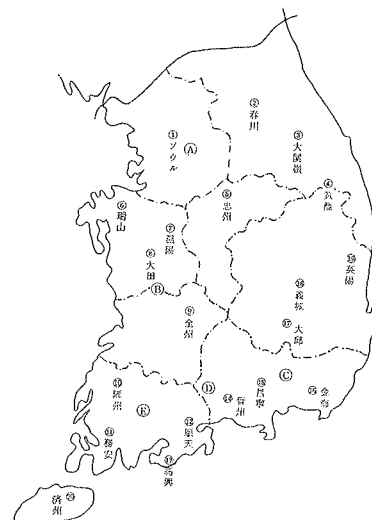


図2 主要野菜産地分布図

山・光州・順天・大田の東の永同などである。また季節的に重要な野菜としてはタマネギは昌寧・務安から、ショウガは全州・瑞山から、またニンニクは高興・義城などから送られているという。(この項つづく)